Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

令和三年度企画展示

現場のミカタ

―発掘調査を読み解く―

三月二二日(月)開幕

巻頭特集　2020 今月の逸品 Returns

遺跡だより　福生市 長沢遺跡

東京都埋蔵文化財センター報 124

当センターの展示ホールには、「今月の逸品」と題して定期的に展示替えを行っている展示ケースがあります。体験コーナーの奥にあるケースがそれなのですが、「逸品」という名のとおり、当館で所蔵する遺物や、当センターで調査を行っている遺跡からの出土品の内、選りすぐりを展示しています。ここでは昨年 2020 年に展示した「逸品」たちのうち、いくつかを取り上げ改めてご紹介したいと思います。※各項目冒頭の「vol. ○○」は「今月の逸品」開始時からの通し番号です。

vol.67「年の初めに …」

2020 年の年頭を飾ったのは四方に突き出した把手や隆帯と呼ばれる盛り上がった粘土紐による装飾が目を引く縄文土器です。「逸品」の名に恥じない見事な土器ではあるのですが、これが 2020 年第一弾に選ばれたのは、土器が作られた時代が理由。この土器が作られたのは約 5000 年前、縄文時代中期前半ですが、研究者によっては「中期中葉」と呼ぶこともあります。2020 年の干支はネズミ。土器は「チュー期チュー葉」・・・。お後がよろしいようで…

vol.70「石材の産地を調べる」

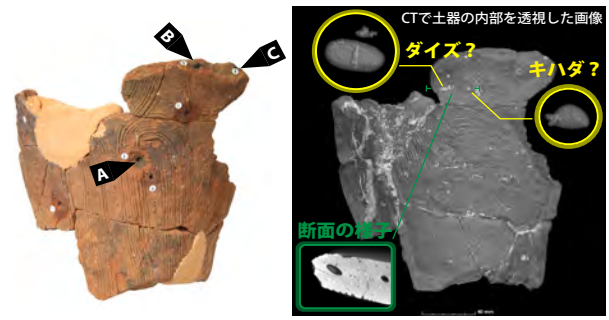
３月からは企画展「リケイ考古学」が始まりました。理科学的技術を応用した考古学の研究をテーマにした展示ですが、これに合わせて「今月の逸品」も「リケイ考古学：Another Mission」として、「理系」な内容になりました。７～８月に展示したのは黒曜石で作られた縄文時代の石器。黒曜石は火山から出た溶岩由来の岩石ですが、含まれる微量元素の量を蛍光 X 線装置等で分析することで、どこの産地（火山）で採れたものか、高い精度で推定することができます。展示した３つの石器は同じ遺跡から出たものですが、分析の結果、それぞれが長野・伊豆・神津島と別々の産地、しかも遺跡から 90 ～ 170km と遠く離れた場所の黒曜石を用いていることがわかりました。諸事情により展示開始直前に担当者が慌てて神津島（竹芝埠頭から大型客船で約 10 時間）まで行くことになったという裏話もあるとかないとか…

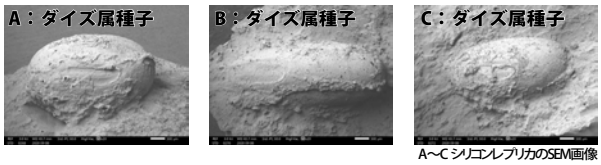
石器の出土した多摩ニュータウンNo.72遺跡とそれぞれの石器に使われた黒曜石の原産地の位置

vol.72「縄文時代の’マメ’知識」

企画展「リケイ考古学」でも取り上げている土器の圧痕研究。土器の表面や割れ目には、土器を作るときに混ざった植物のタネ等の痕跡がくぼみとして残されることがあり、これを土器圧痕と呼びます。くぼみにシリコンを注入して元々のタネの形を復元したレプリカを顕微鏡で観察することで、昔の植物利用などを明らかにしようという、比較的新しい研究方法です。９月に紹介した逸品は、表面だけでなく内部にも大量のタネが見つかった縄文土器。圧痕の特定は通常土器表面を目視で確認するのですが、一つの土器片の表面から大量の圧痕が見つかったことから CT スキャンで観察したところ、なんと土器内部にもさら

に多くの圧痕が残されていることがわかったのです。しかもタネの種類もダイズ、アズキ、キハダと多種多様。偶然混ざったものか、意図的に混ぜたものか、いずれにせよなんとも驚かされる結果となりました。





A～C シリコンレプリカのSEM画像

vol.73「土器の欠片（かけら）の顔認証」

10 月から 11 月にかけて 2 週間という短期間で特別公開したのは、世田谷区大蔵遺跡で出土した縄文時代早期の土器。発掘調査報告書が刊行されたばかりのホヤホヤの成果です。今回も活躍したのは CT スキャン。展示した土器片はいずれも刻みを入れた小さな木の棒を粘土表面で転がすことで模様をつける「押型文（おしがたもん）」というタイプの土器。CT スキャンでそれぞれの土器片表面の 3D 画像を作成してみたところ、AI による顔認証さながら、なんと原体（土器の模様つけ用の道具。今回の場合、木の棒）の同じ破片を区別可能に！ 5 種類の原体を特定することができました。

さらに蛍光 X 線分析装置を用いて土器に使われた土の元素・鉱物組成を調べたところ、1 種類の原体については他の原体を使った土器とは異なる土を使っていることも明らかになりました（CT スキャンでも胎土への混入物の違いを確認できました）。これが何を意味しているのかは今後の課題ですが、科学の目で新たな事実を見出す、まさに「リケイ考古学」の真骨頂が発揮されたと言えるでしょう。

vol.74「ヒスイを見分ける!!」

東京都では毎年 10 月から 11 月にかけて、文化財をより身近に感じられるよう、文化財の特別公開等を行う「東京文化財ウィーク」という事業を開催しています。当館でも 11 月の「今月の逸品」では、文化財ウィークに合わせて逸品中の逸品ともいうべきオタカラを展示しました。美しく緑に輝く縄文時代の大珠（たいしゅ）とその材料となる原石ですが、今年はこの逸品たちにも「リケイ」の光を当てています。大珠は翡翠（ひすい）等の大きくて美しい石に穴を開けたもので、当時の人々の装身具と考えられていますが、問題になるのは使われた石の正体です。通常、大珠には翡翠（現在のところ大珠への使用が確認されているのは新潟県糸魚川周辺で得られた翡翠のみです）が多く用いられますが、見た目だけからは翡翠とは断言しにくいもの（下図左から 2 つ目）があり、科学の目で正体を確かめることにしたのです。蛍光 X 線で石の元素を分析した結果はなんとも驚き。黒くてどうにも翡翠には見えなかったものも含めて大珠がすべて翡翠なのは一安心？でしたが、一方で翡翠と疑わなかった原石の一つはなんと石英（下図右端）。これもリケイの力なくしてはわからなかった発見でした。

2020 年に展示した「今月の逸品」の中からいくつか紹介してみましたが、いかがでしたでしょうか？当館では今年もさまざまな「逸品」の紹介を予定していますので、お立ち寄りの際はぜひご覧ください。

（舟木太郎）

遺跡だより 127

福生市 長沢遺跡

所在地　：福生市大字福生 1072 他
調査期間：2020 年 8 月～ 2021 月 3 月（発掘）
調査面積：約 1,178㎡

長沢遺跡（福生市№.４遺跡）は、多摩川中流域左岸の河岸段丘である拝島段丘に立地し、ＪＲ青梅線福生駅の北西約 300 ｍを中心に約５万㎡の広さが推定されている福生市内最大の縄文遺跡です。現在に至るまでに９回に亘る本調査が行われており、縄文時代中期前半から後半（約 5,000 ～ 4,500 年前）の 40 棟程の竪穴建物跡や土坑・配石が検出され、遺跡中央部を中心として竪穴建物跡等が環状に分布する環状集落が推定されているほか、中世以降の敷石遺構なども確認されています。

今回の第十次調査地点は遺跡の中心からやや北方にあたり、近くにはかつて崖線下に堂川と呼ばれる豊かな湧水があった福生神明社が所在します。東京消防庁福生消防署庁舎改築工事に伴う調査ですが、じつは旧消防第一庁舎棟の建設に先だって昭和 45 年（1970）に実施されたのが記念すべき長沢遺跡の第一次調査であり、推定７棟の竪穴建物跡の発見により遺跡の存在が明らかになりました。今回の調査範囲はこの第一次調査地点を囲むように計画され、また、平成７～８年（1995 ～ 96）の第九次調査地点が南側に隣接することからも、遺構が密度高く検出されることが予測されていました。

現時点で全体の 2/3 程度の調査を終え、石囲炉や石囲埋甕炉を伴う竪穴建物跡６棟（写真１・２）、集石土坑（焼け石を伴う調理施設：写真４）・竪穴状遺構・ピット群・埋甕・配石・土坑、中世以降の敷石や土坑を確認しています。旧地形は多摩川を臨む西向き緩斜面であることがわかっており、勾配の変わる西側を境に遺跡の様相が異なります。西側では竪穴建物跡が高密度で連なるのに対して、東側～中央部にかけては竪穴状遺構や小型の集石、配石が点在する程度であることがわかりました。遺物は、縄文土器（中期：勝坂式、阿玉台式、曽利式、加曽利Ｅ式）・石器（打製石斧・石鏃・石匙・磨製石斧・石皿など）・動物骨などが出土しています。

過去の調査成果から、縄文時代の集落の様相は、遺跡南寄りに中期前半の勝坂式期、北寄りに中期後半の加曽利Ｅ式期の住居跡が集中する傾向が見られ、縄文時代中期を通じた集落内の居住区域の移動がうかがえます。じつに四半世紀ぶりの本調査となる今回の調査によって、長沢遺跡の縄文集落の具体的な様相がより明らかになることが期待されます。

（大八木謙司）

写真２　隣接する新旧の石囲埋甕炉（SI02 号）

写真３　遺物出土状況（SI10 号）

写真１　石囲埋甕炉を持つ竪穴建物跡（SI01 号）

写真４　集石土坑（SX02 号）

かゆい所に手が届く
遺物の基本的な見方　石器の見方番外編ー関東ローム層ー

今回のテーマは「関東ローム層」、つまり地層の話です。石器の話じゃないのかと言われそうですが、関東地方の旧石器を理解する上では、この知識がとても重要なカギになるのです。展示をご覧になったお客様から質問されることもしばしば。そこで今回は、「石器の見方」番外編として、この関東ローム層についてお話します。

関東ローム層は、一般に「赤土」と呼ばれますが、都内の台地上では地表付近の黒い土を数十 cm 程度掘り下げると現れる黄色～オレンジ色の硬く締まった土層です。これらはかつて盛んに活動していた箱根、富士山、浅間山や赤城山など、数多くの火山から噴出した火山灰などが風で運ばれて降り積もったものと考えられており、その厚さは 30m を超えることもあります。地質学では、大きく四区分されており、年代の古い順に下層から、多摩ローム層Ⅰ・Ⅱ（約 12 万年前～ 70 万年前以前）、下末吉（しもすえよし）ローム層（約７～ 12 万年前）、武蔵野ローム層（約４～７万年前）、立川ローム層（約２～４万年前）と呼び分けられています。今のところ、都内で最も古い遺跡の年代が、府中市武蔵台遺跡の約３万 6000 年前ですから、私たちが発掘調査の対象としているのは、最上部の立川ローム層（写真１）ということになります。

旧石器時代に限らず、考古学では地層を重視します。中でも基本となる法則が、「地層累重（るいじゅう）の法則」です。ざっくりとどんな法則か説明しますと、「古い地層の上に新しい地層が順番に重なっていく。」というものです。これに基づくと、上の層から出土した石器は下の層のものより新しいと考えられますし、別の遺跡から出土した場合でも、同じ層から出土していればほぼ同じ年代と判断することができます。関東地方の旧石器時代研究において、地層の理解が特に重要になってくるのは、他の手がかりに乏しいだけでなく、この関東ローム層が広い範囲でほぼ同じ堆積状況を示しており、年代の新旧（相対年代）を考える上で最も有力な指標となるからです。そこで考古学では、立川ローム層を全体の色調や火山噴出粒子のわずかな違いを見出して、さらに細かく見分けます。武蔵野台地上では、これをⅢ～Ⅹ層と名付けています（Ⅰ・Ⅱ層は黒土部分、またⅧ層は見つからないことが多い層です。）。またⅥ層には、約３万年前の南九州・姶良（あいら）カルデラ（現在の鹿児島湾北部）の噴火によって、日本列島の広い範囲に降下した姶良丹沢（あいらたんざわ）火山灰（AT）由来の細かいガラス粒子が含まれていることが分かっています。このATを含む層を対比することで、関東地方だけでなく、より広い範囲での石器の新旧の比較もできるのです（図１）。また、近年の理化学的な年代測定技術の向上によって、他の層についても実際に堆積した年代（絶対年代）に関するデータが蓄積されつつあります。こうした新しい知見については、様々な分野の目で検討していく必要がありますが、今後の旧石器研究の進展にとってローム層の理解がますます重要になってくることは間違いありません。

（佐藤　悠登）

写真１　立川ローム層堆積状況

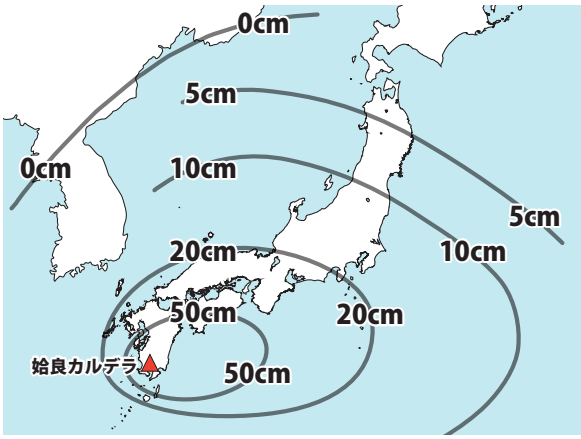


図１　姶良丹沢火山灰（AT）の降灰範囲（町田・新井 1992「火山灰アトラス」より一部改変）

あの遺跡は現在（いま）！？　Vol.18

―　中野山王三丁目アパート　八王子市中田（なかだ）遺跡　―

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。
このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかご紹介します。
もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

JR八王子駅から北西へ約３ｋｍのところ、川口川左岸の微高地上に中野山王三丁目アパートはあります。昭和30・40年代、首都圏の人口急増に対応するために各地で公営住宅の建設が相次ぎましたが、ここも（当時は中野山王三丁目団地）そのひとつです。団地建設に先立ち、昭和41・42年に中田遺跡の発掘調査が行われました。それから40年以上が経過し、老朽化による建替えに伴い、当センターでは平成19・20年度と22・23年度に発掘調査を実施しました。

中田遺跡では縄文時代から平安時代までの竪穴住居跡が確認され、中でも古墳時代後期の集落が主体であることが明らかになっています。当センターが調査した範囲は中田遺跡の西側の一角で、調査の結果、古墳時代後期の竪穴住居跡をはじめ、旧石器時代の尖頭器、縄文時代の竪穴住居跡や集石、中世以降の大溝や掘立柱建物跡などが発見されました。中田遺跡の集落の特徴として、「張り出し貯蔵穴（ちょぞうけつ）」を持つ竪穴住居跡があげられます。竪穴住居の壁の一部に張り出し部を設け、そこに方形あるいは長方形の穴（貯蔵穴）を掘り込みます。張り出し貯蔵穴を持つ竪穴住居跡は、中田遺跡の調査を契機として、関東地方の各地で知られるようになりました。

なお、中田遺跡は昭和46年に八王子市指定史跡に認定され、遺跡の一部が「中田遺跡公園」として保存・公開されています。公園内には、張り出し貯蔵穴を持つ竪穴住居跡が遺構表示として再現されています。　（小西絵美）

◆調査成果が掲載された報告書

2009『八王子市中田遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第231集　東京都埋蔵文化財センター
2012『八王子市中田遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第273集　東京都埋蔵文化財センター

写真１

写真２

写真１　平成22・23年度発掘調査の空撮写真。白線が遺構を示す。
写真２　張り出し貯蔵穴（矢印部分）を持つ竪穴住居跡
※写真１・２　東京都教育委員会提供

写真３

写真４

写真３　写真左側が現在の中野山王三丁目アパート、右側が中田遺跡公園、手前には川口川が流れている。
写真４　張り出し貯蔵穴を持つ竪穴住居跡の遺構表示

【編集部からの訂正とお詫び】「たまのよこやま 122 号」(2020 年 9 月発行) の「あの遺跡は現在 !?」について、「vol.17」となるべきところが「vol.15」と誤って表記されておりました。お詫びして訂正させていただきます。

1/964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

＃47 多摩ニュータウン No.113・115遺跡

多摩ニュータウンNo.113・115遺跡は、旧石器時代から近世までの複合遺跡で、大栗川右岸の河岸段丘上とそれに続く斜面部及び低地に広がっていました。場所は、八王子市下柚木（しもゆぎ）二丁目あたりになりますが、今は宅地となっており、発掘当時の地形をうかがうことはできません。

遺跡の面積は23,100㎡、昭和62年より5回に分けて発掘調査を行いましたが、私は最後の調査である第5次調査を平成3年1月から平成4年8月までの20ヶ月間担当しました。発見された遺構・遺物は多岐にわたっており、旧石器時代のナイフ形石器・槍先形尖頭器（せんとうき）、縄文時代早期の陥し穴、中期の住居跡・配石、平安時代の住居跡、中世の地下式横穴、近世の廃寺跡・墓などが見つかっています。

今回は私が担当した縄文時代の住居跡のことを紹介します。この住居跡は、主柱穴が4本の竪穴住居で中期に造られました。報告書の中では「5号住居跡」と呼ばれています。

炉には中期中葉の土器（勝坂Ⅱ式）が使われており、その頃、住居として使っていたようです。竪穴覆土の最下層には、ロームブロックが多く含まれる層が堆積しており、住居が使われなくなった後、埋め戻した可能性もあります。柱穴の埋まり方を観察すると、柱を抜き取ったと思われる跡を確認することができました。柱穴の内の一つは、先のロームブロックが多く含まれる層の堆積後抜き取られており、竪穴住居の埋め戻し後、柱を抜き取っていたのかもしれません。

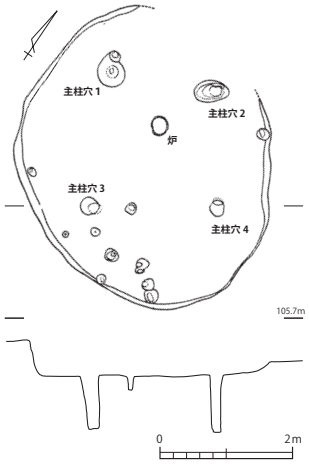


図1　5号住居跡平面・断面図

写真1　炉

住居として使われなくなった後、ここは窪地になります。竪穴覆土の上層からは、中期後葉の土器（加曽利E1～E2式）や石器が出土しており、この窪地は、ゴミ捨て場として利用されたようです。住居として使われていた頃からは、かなり年数がたってからのことであり、窪地になってから埋没を完了するまでに相当の期間がかかったようです。

このように遺構の廃絶過程及び廃絶後の場の利用を復元するためには、遺構の形成過程を把握することが必要で、どのような調査方法をとるかなど、頭を悩ませながら調査をしていた記憶があります。思い出深い遺構の一つです。

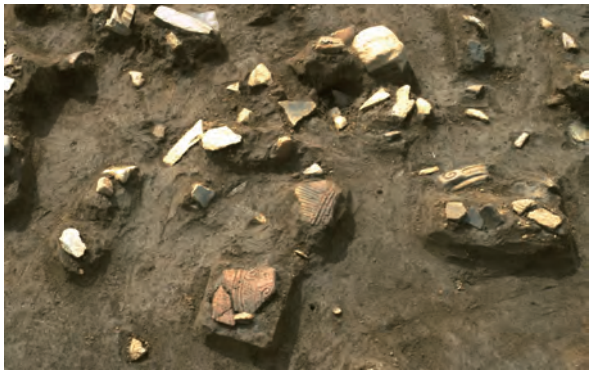
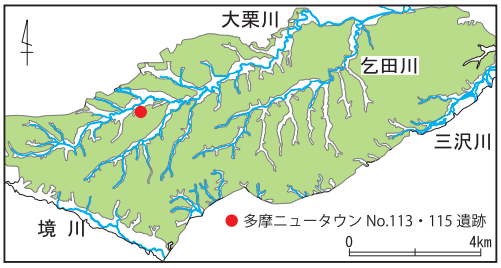


写真2　竪穴覆土上層　遺物出土状況

大栗川流域には、縄文時代中期の遺跡が数多く見つかっており、その中には拠点的な大集落であるNo.72遺跡やNo.107遺跡も含まれています。このような遺跡と比べると、No.113・115遺跡は、住居跡が11軒しか発見されておらず、小規模集落になりますが、大栗川流域における縄文人の活動を考えるうえでは不可欠な遺跡であり、住居跡一軒、一軒からわかる考古学的事実の積み重ねから当時の暮らしぶりを紐解いていくことが大切かと思います。

（西澤　明）



令和３年度
企画展示へのご招待

現場のミカタ

―発掘調査を読み解く―

2021.3.22(月)
～2022.3.9(水)

昔の人びとは、土器や石器といったモノをどのように扱っていたのでしょうか？

単純なようで奥の深いこのギモンを解く手がかりは、「現場」、すなわち発掘調査現場にあります。令和３年度の企画展示では、多摩ニュータウン遺跡群の「現場」を舞台に、モノが遺跡から出土したときの様子に目を向けてみます。

発掘調査の「現場」では、モノが見つかった状況をさまざまな方法で記録しています。掘り込まれた穴の形、埋まった土の特徴など、「現場」でしか得られない情報を詳しく観察し、記録するのが「現場」の最も重要な仕事です。ひとたび土を掘り返すと、遺跡は二度と元の姿には戻りません。そのため発掘調査の「現場」では、図面や写真などさまざまな方法を駆使しながら、まるで現場検証のようにトコトン遺跡を調べているのです。

「現場」でしか得られない情報の例を一つ挙げてみましょう。写真１は、多摩ニュータウン№.200 遺跡（町田市小山ヶ丘）で発掘された古墳時代の竪穴住居跡です。木や草で作られる住居の屋根は、通常年月を重ねるうちに朽ちてしまいます。しかしこの住居跡は、なんと火災にあったため崩れた屋根の一部が残っていたのです。黒焦げになってボロボロの状態でしたが、慎重に周りの土を取り去ると、組み合った柱や屋根に葺かれた茅が奇跡的に現れました。写真１はまさにその瞬間を捉えたものです。古墳時代の人びとが住んだ竪穴住居の茅葺屋根。その貴重な姿が「現場」に残されていたのです。

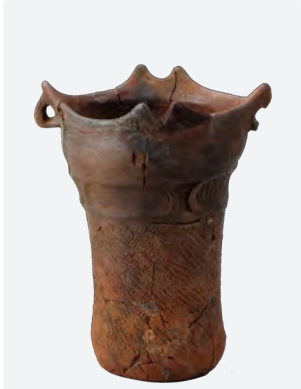
今回の企画展示では、「現場」からモノが見つかった状況を、「埋める」「置く」「大量」「謎」という４つのテーマに分け、遺物を見ただけではわからない人々の営みを、調査記録もあわせることで解き明かしていきます。旧石器時代から近現代までの、ライブ感にあふれたさまざまな「現場」を体感してみてください。ここで少し内容をご紹介。写真２の土器たちは、いずれも縄文時代中期の勝坂式と呼ばれるものですが、それぞれ全く違った状況で「現場」から発見されました。縄文人はこれらの土器をどのように扱ったのか？ぜひ展示室で実際にご確認ください。

（大網　信良）

写真１　焼け落ちた竪穴住居の屋根

No.67 遺跡
（八王子市大塚）

No.520 遺跡（稲城市若葉台）



No.471 遺跡（稲城市若葉台）

No.245 遺跡（町田市小山ヶ丘）

写真２　企画展示に登場する縄文土器（の一部）

※今号の表紙：当センターで保存している多摩ニュータウン遺跡調査時の写真スライドです。写真を含む調査記録がきちんと保管されてきたからこそ、本年度の企画展示「現場のミカタ」を開催することができました。

たまのよこやま 124　　2021 年 3 月 31 日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒 206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296 https://www.tef.or.jp/maibun/